

「あっという間に」と「たちまち」の意味分析

－ ベースとプロフィールの観点から －

李 澤 熊*

leetack@ecis.nagoya-u.ac.jp

Contents

1. はじめに
2. 背景となる理論
3. 「あっという間に」と「たちまち」の意味分析
4. まとめ

Abstract

本稿は、時間の早さを表す副詞「あっという間に」と「たちまち」の2語を取りあげ、認知言語学の枠組みから、相互の意味の類似点・相違点を明らかにしたものである。分析結果を簡単にまとめると以下ようになる。

まず、「あっという間に」と「たちまち」はともに「話し手によってある事柄(「行為・出来事・状態」など)が短時間で実現するものとしてとらえられる」場合に用いられる(同一のベース)。ただし、「あっという間に」は「事柄の変化開始後に注目して述べる」場合に用いられるのに対して、「たちまち」は「事柄の変化開始前に注目して述べる」場合に用いられる(プロフィールの違い)。なお、この2語の意味は次のようにまとめられる。「あっという間に」：<話し手が><ある事柄の変化開始後に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>。「たちまち」：<話し手が><ある事柄の変化開始前に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>。

Key Words : あっという間に、たちまち、類似点、相違点、認知言語学、ベース、プロフィール

* 名古屋大学 教授.

1. はじめに

本稿では、類義関係にある副詞を考察対象とし、認知言語学の枠組みから、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。考察対象とする語は、時間の早さを表す副詞「あっという間に」と「たちまち」の2語である。

ここで、本稿の構成について簡単に述べておく。

まず、2.では本稿で考察対象とする語の類似点・相違点を明らかにする前提として、粉山(2005)を取りあげる。粉山(2005)の研究は類義表現を認知言語学的観点から定義・分類したものである。

次に、3.では先行研究を踏まえ、「あっという間に」と「たちまち」のそれぞれの意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。

最後の4.は本稿のまとめである。

2. 背景となる理論

分析に入る前に、本節では、「あっという間に」と「たちまち」の類似点・相違点を明らかにする前提として、粉山(2005)を取りあげる。

粉山(2005:579-583)の研究は、類義表現の意味の異なりの諸相を、認知言語学の枠組みから明らかにしたものである。以下、その内容を概観する。

まず、類義表現(類義語・類義句・類義文を含む)をプロトタイプカテゴリー¹⁾

1) 河上(1996)は「カテゴリー化」について次のように述べている。

私たちは日常生活において、様々な事物を知覚し、経験する。その量は膨大なものであり、一つ一つを記憶にとどめようとすると大変なことになる。しかし、私たちはそれらの事物を効率的にグループ分けすることができる。つまり私たちには、事物から何らかの類似性や一般性を抽出することで、事物間にあるまとまりを認識し分類することのできる能力が備わっていると考えられる。このような事物をグループにまとめる認識上のプロセスを、一般的にカテゴリー化という。(河上(1996:27))

また、言語の様々な側面に関するカテゴリー化の問題について、プロトタイプ論の見方を採用

と考え、プロトタイプの類義表現を「指示対象・指示範囲(プロフィール)が同一である複数の表現(プロトタイプの類義文:真理条件的意味が同一である複数の文)」と定義し、次のような例をあげている。

例) あした/みょうにち、盲腸(炎)/虫垂炎
花子が太郎をなぐった。/太郎が花子になぐられた。

また、「この定義に基づけば、類義表現の意味の違いは、必然的に、同一の事物・事態に対して異なる捉え方・解釈(construal)をすることができるという人間が有する認知能力に還元できることになる」としている。さらに、プロトタイプから拡張した(非プロトタイプの)類義表現を次のように定義している。

類義表現: 同一の対象を示しうる(指す場合がある)複数の表現

例) 動物/犬、木/松 [上位語と下位語の関係]
門のところに誰からいる。/門の前に怪しい男が立っている。 [描写の精密さの異なる文]
この花は日本語で「サクラ」と言う/呼ぶ。 [一方の語(句)の複数の意味のうちの1つが、他方の語の意味(の1つ)と同一]

羽山(2005)は、以上の事物・事態に対する様々な捉え方(の違い)の観点から、類義表現を大きく10に分類している。例えば、「プロフィールは同一であるが、ベースは異なる」ものとして「land [↔sea] /ground [↔air]、陸上

したことを認知言語学の根幹をなす特徴の一つとしてあげている。

さらに、プロトタイプを「カテゴリーの成員の中でもより中心的で、そのカテゴリーを代表すると思われるもの(河上(1996:209))」と定義した上で、次のように述べている。

そして私たちが事物をカテゴリー化する場合、そのプロトタイプを核とし、その周りにさまざまな成員を位置づけることで、全体を構造化しているとみなす。この考えに基づけば、カテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺のなものがあつたり、成員間で段階性がみられることになる。(河上(1996:32))

【←→海上】／地上【←→空中・地下】、「視点の違う」ものとして「shore【視点が水上】／coast【視点が陸上】、Aさんが名古屋から東京に行った。／Aさんが名古屋から東京に来た。」などがあげられる。

以下では、初山(2005)が提案している「類義表現の定義・分類」に従って、分析を行う。その中で、本稿で考察対象とする語は初山(2005)で分類されている類義表現のタイプの中で「ベースは同一であるが、プロフィールが異なる」ものであるということをはっきりさせる²⁾。

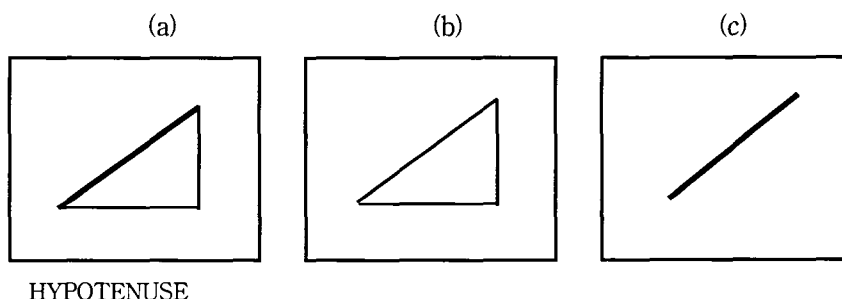
それではここで、本稿で用いる「ベース(base)」と「プロフィール(profile)」という用語について簡略に説明する。これらはLangaker(1987, 1988)の用語で、辻(2002)は、次のように解説している。

認知文法は、百科事典的意味論の立場をとり、ことばの意味は複数の認知領域において記述される。ある特定の認知領域においても、全ての構造が等しく扱われるのではなく、焦点化され、際だちの大きいプロフィールと呼ばれる部分と、そのプロフィールの背景的要素として機能するベースに分かれる。

例えば、直角三角形の「斜辺」という表現の意味記述においては、空間という認知領域における形状が最も重要である。この領域において、想起される概念内容の全体、すなわち直角三角形の形状全体がベースとなる。というのは、「斜辺」の意味を規定する場合には、1本の直線のみを想起するだけでは不十分であり、直角三角形という3本の直線からなる形状全体が概念化されなければならないからである。しかし、「斜辺」ということばは、当然この形状全体を指し示すわけではない。言語使用者は、この形状全体を心に思い浮かべたうえで、その部分構造である斜めの直線に注目し、その部分のみに言及する場合の表現が「斜辺」である。このように、特定の言語表現が直接指し示す部分をプロフィールと呼ぶ。(p.236、下線は引用者)

2) 李(2005)は、本稿で扱うものと同じタイプの類義表現として「思わず」と「つい」を分析している。また、「プロフィールは同一であるが、ベースが異なる」ものとして「うっかり(と)」と「うかつに」を取りあげ、分析している。

<図1> Langacker(1988:59)



3. 「あっという間に」と「たちまち」の意味分析

本節では、類義関係にある「あっという間に」と「たちまち」について、「ベース」と「プロフィール」の概念を用いて、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。

3.1. 先行研究

先行研究としては葉(2004)、国広(1982)などがあげられるが、ここでは比較の詳細な分析がなされていると思われる葉(2004)を中心に検討する。

葉(2004:111)は、「あっという間に」と「たちまち」の共通点について「事態が発生・成立する際の所要時間が少ないことを表す」と述べており、本稿においても基本的に同じ立場に立って考察していく。

(1) 快速船は折りからの強い北風を帆に受けて、風のように南下し、たちまち(あっという間に)視界から消えた。(葉(2004:111))

次に、相違点については、以下のように述べている。

「たちまち」を用いた場合は、変化や動作が開始した時点から、結果や動作

が成立・終了するという過程が急速に展開していくということが焦点の所在となり、過程の所要する時間は短いものの、過程性とある程度の時間幅が要求されるということになる。

一方、「あっという間に」を用いた場合は、変化や動作が開始した時点から、事態が展開していく過程をほぼ捉えられない状況で、結果や動作が瞬時に成立・終了することに焦点があり、結果や動作が成立・終了する瞬時に、予想外という意味が含意されていると考えられる。(葉[2004:114-115])

(2) 挙式が始まる直前に父とふたりっきりで待っていた時、いろいろな気持ちがあふれてきて、父に「ごめんね」と言ってしまった。それを聞いた父は、たちまち(? あっという間に)泣き出した。(葉[2004:116])

(3) あっという間に(×たちまち)食べちゃったね。(葉[2004:117])

葉(2004:116)は例(2)について「過程なしで泣き出すということはあまりにも急速であり、泣いていない状態から涙を流す状態へ移行するという過程と、それに伴うある程度の時間は幅が必要であると考えられ、このため『あっという間に』に置き換えると不自然は文になる」と説明している。

また例(3)については「話者が『食べちゃった』という事態に意識した時に、『食べ始め、食べ続け、食べ終わる』という過程は既に終了し、動作の一連の過程を捉えていない(p.117)」ため「たちまち」が用いられないと説明している。

ここで、次の例を見てみよう。

(4) 日本メンタルヘルス協会の臨時講師だった青木勇一郎先生に直接『心を開放させる催眠』をかけて頂く。友達はあっという間に泣き出し、衝撃を受け、私も嫌な事を忘れられ感動。(http://www.cocoro-rich.com/prof.htm)

例(4)における「泣き出す」の場合も、葉(2004)の主張する「泣いていない状態から涙を流す状態へ移行するという過程と、それに伴うある程度の時間は幅が必要である」と考えられるが、「あっという間に」が問題なく用いられる。このように、葉(2004)の記述では、「あっという間に」と「たちまち」の相違点につい

で明確に説明できない(または、難しい)場合があると考えられる。

さらに、次の例を見てみよう。

(5) a. ×彼女はたちまち笑い出した。(飛田他[1994:271])

b. ○冗談を言ったら彼女はたちまち笑い出した。(飛田他[1994:271])

飛田他(1994:271)は、上のような例をあげて「たちまち」は「条件のつかない単独の動作などについては用いられない」と指摘している³⁾。このように、例(4)の場合「たちまち」が用いられないのは、「条件のつかない単独の動作」つまり、「先行の出来事が想定できない」からであると考えられる(詳しくは後述)。

そこで本稿では、以上を踏まえて、「あっという間に」と「たちまち」の意味特徴をより明確にするとともに、両語の類似点・相違点についてもさらに詳しく考察する。

3.2. 「あっという間に」と「たちまち」の意味分析

上にも述べたように、以下では「ベース」と「プロフィール」の概念を用いて「あっという間に」と「たちまち」の類似点・相違点を明らかにする。

3.2.1. 類似点(同一のベース)

まず、「あっという間に」と「たちまち」が類義関係にあることを以下の例に基づき、再度確認する。

(6) 三十棟ものアパート群に住む数十人の子供たちが、皆私をデミアン、デミアンと呼んでなつてくれたので、私の名前は、あっという間に(たちまち)この大きなアパート全体に知れ渡ってしまった。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』:341)

(7) 太郎が言った。「料理は男さ」

「うちのおふくろなんか、塩数の子の塩の抜き方も知らないんだ」と太郎が言った。

「暮のうちから、何日もかかって水に漬けているから、俺が教えてやったのさ、

3) 国広(1982)にも同様なことが指摘されている。

米のとぎ汁につけておけば、あつというまに(たちまち)抜けますよって。(中略)」（曾野綾子『太郎物語』:111）

(8) 翌日にとっておこうと心に決めた粥の残りも、眼の前にあればつい手が出て、たちまち(あつという間に)むさぼり食べてしまい、ウッウツと反芻しつつ夜っぴて見守るうち、暁方息がかわって母は死んだ。(新田次郎『アメリカひじき・火垂るの墓』:366)

(9) 生徒は嫁入り前の十六、七歳までの者が多く、一部の主婦達を除いては、ほとんどが全寮制であった。ぎんは漢文と歴史を教えながら、そこの寮の舎監を兼ねた。満寿子が目をつけたとおり、ぎんの清楚な美貌と博識はたちまち(あつという間に)生徒達の人気の的となり、一カ月もしないうちに「姫君」と綽名がつけられた。(渡辺淳一『花埋み』:201)

以上の例は、ある事柄(行為や出来事、状態など)の変化について述べていると考えられる。また、その事柄の変化というのは、話し手によって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると考えられる。

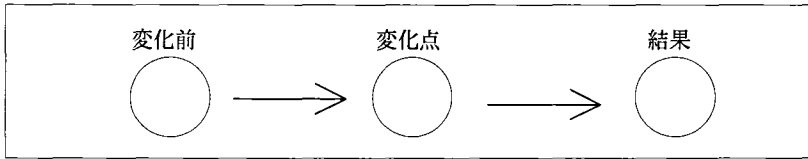
例えば、例(6)は「私の名前がアパート全体に知れ渡る前の状況から知れ渡り終わるまで」の変化が問題となっており、またそれは、話し手にとって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると解釈することができる。

また、例(8)の場合も「食べる前の状況から食べ終わるまで」の事柄の変化が問題となっており、またそれは、話し手によって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると言える。

以上のことから、「あつという間に」と「たちまち」は「話し手によってある事柄(行為・出来事・状態など)が短時間で実現するもの」としてとらえられる」という共通の意味を持っていると考えられる。

ここで、「ある事柄の変化」を<図2>のように示した場合、この2語は「ある事柄が短時間で実現する」という共通のベースを持つことになる。

<図2> (同一のベース) <事柄の変化>



一方、「あつという間に」と「たちまち」は違う意味の側面も持つ。以下の例において、「あつという間に」を「たちまち」に、「たちまち」を「あつという間に」に置き換えてみると、この文脈では、不可能か不自然な文になる。

(10) (グラフを見ながら)2004年、2005年と2年間であつという間に(×たちまち)伸びたのがわかります。

(<http://www.itmedia.co.jp/bizid/articles/0609/13/news044.html>)

(11) この頃の医者が困るのは、待合室が、老人の社交場になったことだ、と太郎は思う。七十歳以上は、医療費が全額タダになったとかで、主におばあさん連は、ちょっとどこかが悪いと、たちまち(×あつという間に)医者にやって来る。いくら待たせられても、忙しくないのだから一向にこたえない。(曾野綾子『太郎物語』:529)

3.2.2. 相違点(プロフィールの違い)

それでは本節では、「あつという間に」と「たちまち」の相違点について考察する。

まず、「あつという間に」についての例を見てみよう。

(12) 平べったい大ぶりのカツが2枚敷き詰められ、ご丁寧にその上にもう1枚。器からはみ出しそうで、下に隠れているらしきご飯もキャベツも見えない。とても食べきれないと思ったが、中濃とデミグラスをかけ合わせたような、甘めのソースに食欲を刺激され、あつという間に平らげていた。

(<http://www.yomiuri.co.jp/tabidomestic/japan/20060925tb0a.htm>)

(13) ユートピアともいえる場所で、兵士たちも次第に心を開いていく。映画はリアリズムでなく、寓話(ぐうわ)的な語り口で進み、一堂に会した人々が緊張をほ

ぐしていく過程を見せる。手りゅう弾が爆発し、はじけたトウモロコシがポップコーンの雪となって降ってくる場面は、夢を見るような美しさ。イノシシ狩りのシーンは、うきうきと楽しい。韓国映画の充実ぶりに感嘆しながら、あつという間に終幕に向かう。

(<http://www.yomiuri.co.jp/entertainment/cinema/review/20061027et09.htm>)

(14) 協会理事の鈴木は「名作とされる戯曲でも絶版になるケースが多い。次の世代に継承する必要があるのではないか」と、狙いを語る。坂手会長も「まだ認知度は低いが、今後、あつという間に広がる可能性がある」と話す。

(<http://www.yomiuri.co.jp/book/news/20061023bk11.htm>)

(15) 筆ペンを握り、無心に字の練習に励む女性たち。「集中して書いているとあつという間に時間が過ぎてしまいます」(東京・銀座で)

(http://job.yomiuri.co.jp/news/jo_ne_06091413.cfm)

以上の例は、ある事柄(行為や出来事、状態など)の変化について述べていると考えられる。また、その事柄の変化というのは、話し手によって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると考えられる。さらに、以上の例からは「変化の開始後の状況に注目する」という意味も読み取れる。

例えば、例(12)は「カツを平らげるまで」の変化が問題となっており、またそれは、話し手によって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると解釈することができる。つまり、「食べ始めてから平らげるまでの時間が短い」ととらえられているということである。

また、例(15)の場合も「筆ペン教室の授業時間」の変化が問題となっており、またそれは、話し手によって「短時間で実現する(終わる)もの」としてとらえられていると言える。つまり、話し手は「授業時間がスタートしてから終わるまでの時間が短い」ととらえているということである。

以上のことから、「あつという間に」の意味は<話し手が><ある事柄の変化開始後に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>ことを表すと記述することができる。

続いて、「たちまち」についてと取りあげる。以下の例を見てみよう。

(16) 日本では収録短編の中で、「母をたずねて三千里」だけが突出して有名になっているエドモンド・デ・アミーチスの小説「クオーレ」が、タンブリーニさんの研究テーマだ。日本から持参した日本語版を見せると、たちまち(×あっという間に)手にとり、妻のアンナさんと一緒に熱心にページを繰り始めた。

(http://www.yomiuri.co.jp/torino/feature/torinese/fe_to_06022201.htm)

(17) 彼はそっと、あたまをもちやげてみたかった。しかし、こわくって、とてもそんなことなぞできなかつた。が、彼は目をあけて、あたりのようすを見ようと思ひ、少し首をずらそうとした。そうしたら、彼はたちまち(×あっという間に)、くらくらくと、なつてしまつた。(山本有三『路傍の石』:181)

(18) 夜に入ると、すぐそばの貯水池の食用蛙が、ブオンブオンと鳴き、そこから流れ出る豊かな流れの、両側に生い繁る草の、葉末に一つずつ平家螢が点滅し、手をさしのべればそのまま指の中に光が移り、「ほら、つかまえてみ」節子の掌に与えると、節子は力いっばいにぎるから、たちまち(×あっという間に)つぶれて、掌に鼻をさすような生臭いにおいが残る、(中略)(新田次郎『アメリカひじき・火垂るの墓』:34)

(19) 私の質問に合田は聞えぬふりをして、机の書類を一枚ずつ整理にかかつた。彼は紙を破つたりまるめたりしながら、ときどきみすばらしく肩で吐息をついていたが、ふと顔をあげて窓のそとを見ると、たちまち(×あっという間に)目を光らせて体をおこした。(開高健『パニック・裸の王様』:24)

まず、以上の例は、ある事柄(行為や出来事、状態など)の変化について述べていると考えられる。また、その事柄の変化というのは、話し手によって「短時間で実現するもの」としてとらえられていると考えられる。

さらに、以上の例からは「変化の開始前の状況に注目する」という意味も読み取れる。例えば、例(16)は「手にとる」という行為に先行する「日本語版を見せる」という事柄が存在しており、話し手はその状況(つまり、「手にとる」という行為を行う前の状況)に注目していると考えられる。

また、例(17)の場合も「くらくらくとなる」という状態に先行する「あたりのようすを見ようと思ひ、少し首をずらそうとする」という事柄が存在しており、話し手はその事柄に注目していると考えられる。

このように考えると、例(18)は「平家螢が短時間でつぶれたが、それは節子が

力いっぱいぎってから間をおかず、短時間でつぶれた」というように解釈することができ、話し手は「事柄の変化開始前の状況に注目している」ととらえることができる。

また、例(19)の場合も「目を光らせて体をおこす」という行為は短時間で実現したものであるが、それは「顔をあげて窓のそとを見る」という先行する行為から、間をおかずに行った行為であるというようにとらえられる。

以上のことから、「たちまち」の意味は<話し手が><ある事柄の変化開始前に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>ことを表すと記述することができる。

それではここで、「あっという間に」と「たちまち」の意味の相違点(プロファイルの違い)について検討する。

まず、上の例(16)~(19)における「たちまち」は「あっという間に」で言い換えることができない。それは先に見たように、「たちまち」は「問題となる事柄の変化の開始前に注目して述べる」場合に用いられるのに対して、「あっという間に」は「問題となる事柄の変化の開始後に注目して述べる」場合に用いられるからであると考えられる。

このことを例文に基づいて説明すると、例(16)~(19)は「問題となる事柄の変化の開始前の状況(先行する事柄)」つまり、「手にとる」前の「日本語版を見せる」、「くらくらとなる」前の「首をそらそうとする」、「つぶれる」前の「力いっぱいぎる」、「目を光らせて体をおこす」前の「窓のそとを見る」という事柄に注目して述べている文であり、「たちまち」が用いられている。

この場合、「あっという間に」が用いられないのは「問題となる事柄の変化の開始後の状況」に注目するということが考えられないからである。つまり、「手にとり始めて、とり終わるまでが短時間で実現する」、「つぶれ始めて、つぶれ終わるまでが短時間で実現する」というような解釈ができないからである。

今度は逆に「あっという間に」を「たちまち」で言い換えられない例を見てみよう。

(20) 庄九郎は、火の出るように攻めたてた。

クーデターというのは、あつという間に(×たちまち)仕遂げなければ、水の入るものだ。

「もみつぶせつ、もみつぶせつ」と、最前線を駆けまわって指揮をした。(司馬遼太郎『国盗り物語』:1380)

(21) サッカーや野球のボール、お皿……。氷でこれらの形をあつという間に(×たちまち)作ることができる道具があるとしたら、使ってみたくはないだろうか。
(http://www.pronweb.tv/newsdigest/061026_ice.html)

(22) 去年は本当に運良く(棋聖の)タイトルをとることができてうれしかった。あつという間に(×たちまち)一年たって、もう次(防衛戦)がきたのか、という感じがです。(http://www.sankei.co.jp/shogi/kisei/010529_kiesi02.html)

(23) 当時4歳だった長女と、まだ1歳の長男を抱えながら、電気も水道もない森のなかでの作業。「朝、長女を幼稚園に送って行っても、作業をしているとあつという間に(×たちまち)お昼になって、迎える時間になってしまうんです」と、日の短さを恨むこともあったとか。(http://sumai.nikkei.co.jp/style/kurashi/13b_1.cfm)

上でも説明したように、「あつという間に」は「問題となる事柄の変化の開始後に注目して述べる」場合に用いられるのに対して、「たちまち」は「問題となる事柄の変化の開始前に注目して述べる」場合に用いられる。

このことを例文に基づいて説明すると、以上の例は「問題となる事柄の変化の開始後に注目し、短時間で実現(終了)する」というようにとらえられ、「あつという間に」が用いられている。

例えば、例(20)は「クーデターというのは一度仕掛けたら、短時間で仕遂げなければならない(終了させなければならない)」というようにとらえられ、「問題となる事柄の変化開始後に注目している」ことがわかる。

また、例(22)の場合も「(例えば)去年はタイトルをとるなど、嬉しいことがたくさんあったので、1年という期間(つまり、開始から終了までの期間)が短く感じられた」というように解釈することができる。

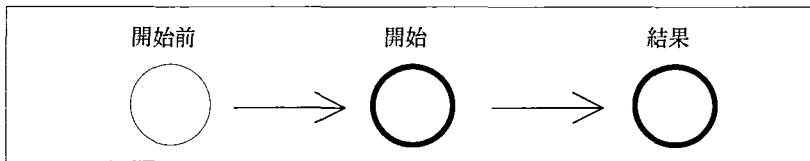
以上の例において、「たちまち」が用いられないのは、文の状況からもわかるように「事柄の変化開始前に注目する」ということが想定しにくいからである。

例えば、例(21)は「作り始めてから終わるまでの時間が短い」というように「事柄の変化開始後の状況に注目している」と考えられるため、「たちまち」を用いると不自然な文になる。つまり、「事柄の変化開始前の状況(先行する事柄)に注目する」ということが考えられないということである。

また、例(22)の場合も「(例えば)日々の生活があまりにも忙しくて、一日の日課がスタートしてお昼になるまでの時間を短く感じる(とりわけ、作業をしているとさらにそう感じる)」というように「事柄の変化開始後の状況に注目している」と考えられるため、「たちまち」を用いることができない。

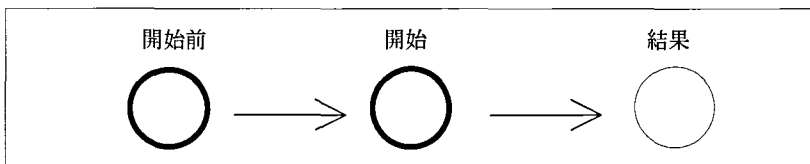
以上、「あっという間に」と「たちまち」の相違点について見てみたが、このことを図で示すと次のようにまとめられる。

<図3>- 「あっという間に」<事柄の変化>



→「変化開始後(プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

<図4>- 「たちまち」<事柄の変化>



→「変化開始前(プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

ここで、「あっという間に」と「たちまち」が両方用いられる例を見てみよう。

(24) 船体の重さは、進水台の上ですべてのしかかってくるので、万が一松材が分離してしまったら、たちまち(あっという間に)船体は横転してしまう。それを防ぐためには、決して曲ったり折れたりしないような精度の高い、しかも思いきり太いボルトを使わなければならないのだ。(吉村昭『戦艦武蔵』:213)

上の例は「船体が横転するまでの時間が短い」というようにとらえられ、2語両方が用いられる。ただし、「あっという間に」は「問題となる事柄の変化開始後に注目する」場合に用いられることから、「船体が横転し始めて、完全に横転するまでの時間が短い」というように解釈することができる。

それに対して、「たちまち」は「問題となる事柄の変化開始前に注目する」場合に用いられることから、「松材が分離したら、間をおかずに横転する」というように「先行の事柄から横転し始めるまでの状況」に注目される。

4. まとめ

以上、本稿では「あっという間」と「たちまち」を取りあげ、認知言語学の枠組みから相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。以下、分析結果を簡単にまとめておく。

まず、2語の個別の意味の分析結果をまとめると次のようになる。

「あっという間に」

<話し手が><ある事柄の変化開始後に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>ことを表す。

「たちまち」

<話し手が><ある事柄の変化開始前に注目し><(その事柄が)短時間で実現する><ととらえる>ことを表す。

次に、2語の相互の意味の類似点・相違点については、以下のようにまとめられる。

「類似点(同一のベース)」

<話し手によってある事柄(行為・出来事・状態など)が短時間で実現するととらえられる>ことを表す。

「相違点(プロフィールの違い)」

「あっという間に」→「事柄の変化開始後に注目して述べる」場合に用いられる。

「たちまち」→「事柄の変化の開始前に注目して述べる」場合に用いられる。

참고 문헌

- 李澤熊(2005) 「非意図的であることを表す副詞の意味分析」『日本認知言語学会論文集』第5巻, 日本認知言語学会, pp.588~591
- 河上誓作(1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社出版
- 国広哲弥(1982) 「たちまち・スグニ・キュウニ」, 国広哲弥編 『ことばの意味3』, 平凡社, pp.146~153
- 辻幸夫(2002) 『認知言語学 キーワード事典』, 研究社
- 葉懿菅(2004) 「『たちまち』と『あっという間に』の意味分析」『日本語・日本文化研究』第14号, 大阪外国語大学日本語講座, pp.111~118
- 飛田良文・浅田秀子(1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版
- 籾山洋介(2005) 「類義表現の体系的分類」『日本認知言語学会論文集』第5巻, 日本認知言語学会, pp.579~583
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol.1*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988) "A View of Linguistic Semantics." In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.49~90. Amsterdam : John Benjamins.

例文出典

- (1) CD-ROM版 『新潮文庫の100冊』(1995)
- (2) 検索エンジンgoogle(<http://www.google.co.jp/>)
- (3) 検索デスクSEARCH DESK(<http://www.searchdesk.com/>)

- ❖ 투고일 : 2006. 12. 31
- ❖ 심사일 : 2007. 1. 25
- ❖ 심사완료일 : 2007. 2. 15